

ムサビの教員が選ぶ
美大生におすすめの本

Recommended books for art students.

身体運動文化研究室
森敏生教授

『身体（からだ）が生み出すクリエイティブ』
（ちくま新書；1307）

諏訪正樹 著，筑摩書房，2018



この本は新書なので読みやすく手元におきやすいものです。著者は「身体知」を研究する認知科学者です。「身体知」といってもピンとこない人もいるかもしれません。わたしたち（の身体）は、コトバや理屈で説明できることよりもはるかにたくさんのことを暗黙に知っています。クリエイティブや創造性のメカニズムについてはわからないことが多いのですが、著者はクリエイティブにとって身体知が欠かせないと考えています。この書が扱うクリエイティブは発明家やプロフェッショナルの特殊な能力ではありません。日常生活に溢れている柔軟な思考や臨機応変な行為などです。著者は、私たちのクリエイティブの源泉が身体の内面に沸き起こる体性感覚や情動ではないかという仮説を立てています。知的問題、デザインスケッチ、お笑いのツッコミ、料理、野球の打撃など、豊富な話題が日常のクリエイティブとして取り上げられています。これらがなぜクリエイティブなのか、著者の解説に興味がつきません。また、最近話題を集めているAIの可能性や限界にも言及しています。

『体はゆく：できるを科学する〈テクノロジー × 身体〉』

伊藤亜紗 著，文藝春秋，2022



美学を専門とする著者が5名の科学者・エンジニアと対話しながら、テクノロジーを介してこれまで知りえなかった体（からだ）の可能性について考察しています。ここでは、「できるようになる」ことの不思議さや豊かさを私たちは奪われているのではと問題提起しています。「できる」「できない」が単純に能力の優劣と捉えられてきたからです。けれど「できる」も「できない」も単純な物差しで判断できるようなものではありません。「できるようになる」には、わたしたちの体（からだ）がもつ尽きない可能性や複雑さに根ざした不思議で豊かな事実があることを本書は教えてくれます。何か新しいことができるようになるのは、体に意識的なコントロールから外れて「思いがけずできちゃう」ユルさがあるからで、意識を超えて「ゆく」からだというわけです。このような体とテクノロジーとの出会い方を探求する興味深い事例がいろいろと紹介されています。

『子どもの遊びを考える：
「いいこと思いついた！」から見えてくること』

佐伯胖 編著，北大路書房，2023



この本は、「子どもの遊び」について論じたある大学院生の修士論文がもとになって編まれたものです。これを世に出そうと考えた編者は、我が国の認知研究や学習研究の第一人者で、「遊び」の研究で見落とされていた「いいこと思いついた！」を理論的に掘り下げる修論の「おもしろさ」（新奇性や独創性）に着目しています。その「おもしろさ」を、児童学や幼児発達の研究者とともに検討し、自然環境をフィールドにした実践家に読み解いてもらうことで、「遊び」の新たな捉え方を切り拓こうとしています。そのポイントは、「遊びは自発的な活動」という能動態だけで語れるのではなく、「思いつき」が生まれ出てくる（到来する）こと、そして「遊び」は「中動態」的に起こるという考え方に立つところにあります。ここで「中動態」の解説はできませんが、新しいアイデアが何かの啓示のように到来することに注目しているのです。これって芸術的な制作と重なり合う特徴ではないでしょうか。

『見えないスポーツ図鑑』

伊藤亜紗，渡邊淳司，林阿希子 著，
晶文社，2020



なんとも不思議なタイトルです。「見えないスポーツ」はイメージの中でのスポーツではありません。この本が扱っているのは、「目で見ないスポーツのわかり方」を様々な競技のエキスパートたちと一緒に、だれでもが「感戦」（観戦ではない）できるように「変換」・「翻訳」する具体的手法を探り当てることです。目では見えない競技の本質に迫るような一体感や動作の質感を、競技経験の有無や性別や身体の違いを超えて誰もが味わえるような手法を試行錯誤しながら作り出します。目が不自由でスポーツ観戦ができない人でも「感戦」できる手法、さらにはあたかも競技のフィールドに入り込んだ「巻き込まれ感」をも鑑賞できるような手法を、ラグビー、アーチェリー、体操、卓球など十種の競技に関して提案しています。